若疑シク覚候ハバ
我等ノ所業終候処ヲ
爾等眼ヲ開テ看ヨ

5月20日
毎月5日、20日発行
第50号
購読料30円
半年分 800円 1年分1,500円（〒共）

叛旗
共産主義者同盟

発行人 川崎文人
編集人 仲代真理
発行所 東京都新宿区百人町2－16－18 小林ビル105号室 蒼氓社気付 共産主義者同盟「叛旗」編集委員会
TEL 03－362－0149
振替 東京 162856

6月9日 首都圏反帝戦線総決起集会（別掲参照）
6月中旬 早大闘争
7月11日 共産同政治集会（別掲参照）

5月攻防の全成果を踏まえ、早大、インフレ－投機闘争を突破口に
日帝の泥沼的延命策を打ち砕く、6月攻勢へ！

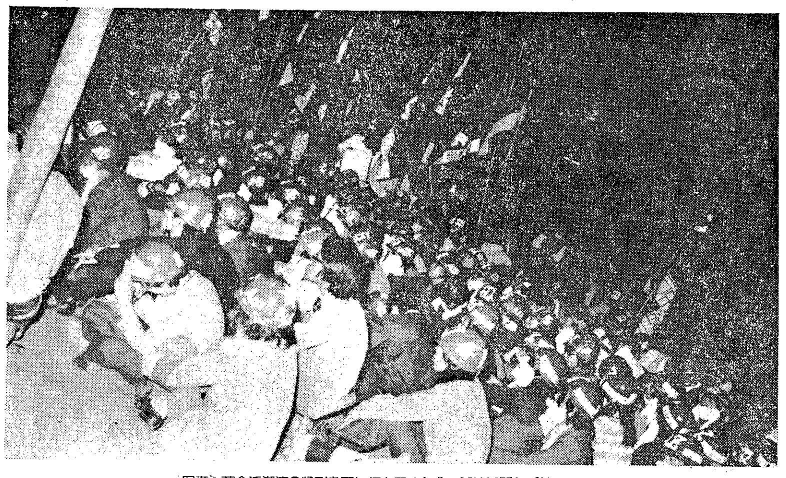
全都、全国の闘う戦線を結集し 5－15沖縄闘争、首都に炸裂！

全国の同志友人諸君！「叛旗」購読者諸君！73年春期攻勢の火の手は、ますます燃え拡がり、我々の旗の下、わが赤ヘル反帝戦線は可能な限りの戦線において、最も果敢に闘い抜いている。5月2日立川基地へ強行された自衛隊進駐完了策動に対しては、反戦兵行動隊と、緊急決起した首都圏反帝戦線の部隊によって、圧倒的な阻止闘争が展開され、自衛隊放逐－基地撤去へ真に闘う戦線はわれわれをおいて他にないことを全立川住民に知らしめた。5月10日から開始された三里塚第二期工事区域への強制立入調査阻止闘争では、2日間に渡る実力戦によって、公団職員、ガードマンをけちらし、わが赤ヘルの戦闘性をいかんなく発揮したのである。一方、早大では、ますます危機感を深める革マルの反逆じみた白色テロが猖獗化する中で、村井体制解体－革マルせん滅に向けた早大大衆の不退転の闘いは持続しており、反帝戦線と全学行動委の闘う学友との戦列は益々と強化されている。

5月初旬における、かかる諸戦線での闘いを発火点として、5・13～15連続闘争は、全国反帝戦線の強固な戦列をもって首都に炸裂した。5・15沖縄闘争は、渋谷区神宮通り公園における結集した集会で開始された。開会前より結集した百八十名のヘルメット部隊は13日の反帝戦線大会、14日の立川闘争の圧倒的成功を経て益々意気盛んであり、定刻総数二百五十名での熱気にあふれた集会を終えて統制をもって領導すると共に、果敢なデモンストレーションを貫徹したのである。

沖縄闘争への永続的確執から、6月早大、投機を両軸とする階級攻防の最前線へ進撃せよとの鮮明な主張の大胆な提起こそ5・13－5・15連続闘争の圧倒的勝利の鍵であったのだ。5・15闘争への総過程で如実に示されたことは、政治の事実への矮小化部分の低迷とそれらを止揚する総体的戦略の必要性である。

メモリアル的に沖縄一周年を掲げた8・25共闘系等は早大闘争へ大衆的にも党派的にも応えきれぬ故沈滞し、小選挙区制粉砕を第一スローガンとした革マル、中核派等は、併列スローガンの相互関係自体を切開し得ぬ故に、田中、自民党への社共のムード的反発の増大と、民衆の苦悩の原因との位相差を透視し得ぬのである。われわれは早稲田－投機闘争を両輪に六月攻防の環を定め、さらに小選挙区制粉砕の原基を国家問題としての沖縄の凝視から突き出してゆかねばならない。無論、われわれには二度目の喜劇は許されないのであって、プラグマチズムに陥ずることなき思想、実践、組織力こそが勝敗の要なのである。さらに前進せよ！


＜写真＞革命派潮流の戦列を更に打ち固めた5・15沖縄闘争（神宮通公園）

沖縄闘争の永続的展開を全戦線の攻勢の糧とせよ

5・15闘争を我々は沖縄の永続的課題たる民族－世界空間の止揚を掲げ、自衛隊・基地、構造的インフレとの闘いの集約点として貫徹した。本紙前号でも述べた我々の永続的沖縄闘争への視座は、この五月に70年春以降の沖縄－砂川－三里塚戦略の真価が如実に問われる形で総体的な射程を有した。つまり5月2日の立川本進駐阻止、5月10・11日の三里塚第二期工事区域立入調査阻止闘争に引き続いての5・13～15首都総力戦がそれである。沖縄－砂川－三里塚戦略を内化－拡充させせんと持続している労闘、早大を頂点とした学闘、および投機闘争への新展開を含めれば、我々はその実体力量に勝る豊富な実践内容を既存のいかなる新旧左翼に比して獲得しつつあることを断言しうる。

5・15闘争に日共・民青全学連は「小選挙区制、筑波法案粉砕」をメインスローガンにかかげ、反スターリン主義を標榜する革共同・革マル全学連もどういう訳か全く同一のスローガンで結集を呼びかけた。我々は既に筑波法案粉砕の闘いを各学園レヴェルで開始しているし、小選挙区制闘争についても60年初頭の憲法闘争を糧としつつ牙を研いでいる。だが、4・28を総花的、併列的スローガンでやりすごし、ゼネスト支援でリアリティを持たせんとし、国会動向に従い対小選挙区制粉砕闘争を5・15にすえた革マル派等には、何故4・28なのか、5・15なのかへの検討も、昨春を省みての痛みのかけらもないのである。社、共なみに政治を力学やヘゲモニー分析で事実政治として扱う革マル派には沖縄闘争は昨年5・15で終了しているのであるが、これらを批判し告発している部分についても政治を事実の窓から見るというブルジョアポリシーの発想に拠っている限り大同小異なのである。

この五月における我々の闘争の具体的、実践的[illegible]らがわれわれにつきつけている課題に比して、5・15沖縄闘争は確かに事実としてのリアリティには欠けるといるといいえた。その意味では砂川－三里塚戦略が開示した地平と、沖縄闘争が行きついた現地点は確実に近接域にある。われわれがこの五月の立川本進駐に一切デモさえ組めず、事後集会に終始した中核派等や、三里塚立入調査阻止に姿さえみせ得なかった理戦や情況等諸雑派に比して、情勢のヴィヴィットな把握と対応力において圧倒的な優位性を現実に保持しさし示したことについては言をまたない。だが、他方でわれわれは五月の立川、三里塚闘争が闘いの内部意識と共同性の分野で抱え込んだ困難を押し隠しはしない。つまり現況は俗物共の眼には沖縄よりも、三里塚、砂川が、さらにそれよりも小選挙区制が政治的リアリティをかつ民衆的切実性を有しているかに錯覚させる条件を備えているということだ。

だが諸君、〈現実〉は事実に解消され得ぬように、行政的事実と政治的リアリティは似て非なのである。このことこそは、69年敗北の一つの質、秋期決戦と全共闘運動の敗北からわれわれが学んだ核の中心点である。階級闘争の現況に、後退戦の認識を持たず、つまりは敗北の必然性を了解しえぬ多くのお目出たい党派達は、徹底して肉体派へ純化しても浅間－テルピアプを越えることは出来ず、また現下の早大闘争が全共闘運動の何を継承し、何を付加しているかについても評価軸を有しないのである。

革命の現実性の変容と我々の政治思想――戦略

読者諸氏は周知のように70年春以降のわれわれの沖縄－砂川－三里塚戦略は、はっきりと事実政治を相対化し、革命の現実性の変容下で、政治の総体性を獲得すべく提示されてきた。われわれに今、必要なのはそれ故そのように提示されてきた戦略を裏付けている政治と民衆との関われの質について明敏な把握、そのような方向での戦略の深化に他ならない。

5・15を沖縄の永続的課題を見すえ闘う、かつ〈沖縄〉をめぐる全面的党派論争を展開しつつ準備遂行するという我々の基本方向は将しく右の時代と政治把握に支えられていた。5・15を経た今、我々は13日以後の連続首都闘争で膨大な大衆的エネルギーとの交歓と圧倒的な組織力量の蓄積を成し遂げたことを全国の読者に報告する。だが、全党派および階級戦線総体との連関で5・15を把えてみる時、社・共・革マルと等しく新左翼の側においても行政的国家との事実政治攻防の呪縛からのがれ得ないことが、より明らかになりそのことが民衆と政治との間の障壁となっていることを5・15は突きつけたといえるのである。我々は、分派過程においてその個所に固執し、革命のかくめい、党－大衆構造の止揚を掲げてきた。だが我々は変容の中に在るのではなく時代と状況の只中に在る以上、我々の思想的－綱領的拠点構築の営為と状況との接点こそが常に問われねばならない。そのような視角から沖縄－砂川－三里塚戦略は何度も把え返され、相互の戦略的位相差にもかかわらず総体的革命像への構想力へ統合されねばならぬのである。無論そのような方法的視座に依る場合においてのみ、沖縄－砂川－三里塚戦略は、旧来の淀まれる戦略概念たる、戦術的空間の総和や、弱い環の序列づけから離れて、世界戦略と通底しうるのである。

さて、沖縄への固執は我々に政治革命の中心問題は、政治喪失の時代状況であるが故に更に〈国家〉であること、その課題は戦略的には民族－世界空間の破砕であることを告げた。砂川は我々に事実的勝利が主体の宙づりと空洞化へ転移するという、社会的共同体と政治的共同性のはざまで、惹起する全課題をつきつけ、三里塚は我々に砂川反対同盟の轍を踏まず社会的団結は如何に維持しうるかの難問をつきつけている。後の二つは、前者の異質な〈政治〉共同性水準への接近の指標と異なり、実は我々の政治的共同性の日常に足をすくわれている範囲における鏡である。

そして、それら両者の相乗のうちに、新たな革命との構想力と、我々自身的な伝統の克服の中から、我々の道が世界革命としてしかありえない日本革命の展望は内在するのである。

思想も実践も当然であることを了解し得ぬ、党派的主義者－事実政治屋の密通に対しては、我々の思想的現実と現実的思想の歩みが自ずと陶汰を行なうであろうが、二、三象徴的な政治思想と事実政治をめぐる混迷状況を最後にみておこう。四トロ派内での沖縄、立川自衛隊闘争をめぐる論争は、住民登録拒否などの自衛隊への事実的反撃が、戦略的な反戦兵士獲得視点からして誤まりであるか、大衆的政治組織化の視点からして正しいのかの下らぬ代物である。自衛隊内反乱も、自衛隊の現状拡大も日本革命とは無縁であることもわからぬ諸君はまず「SECT6」資料集あたりを双方共読んでみるべきだね。中核派は県労協や革マル派が若夏国体自体に反対せずに自衛隊参加のみに弱々しく反対していると批判している。だが若夏国体自体への批判は、諸君の沖縄奪還論＝日琉同祖論の否定の上にのみあることを考えるがよい。理戦派内部での国際主義派結成へ至る公然たる分裂は現在では全国的、全党派的には明らかにされていないが、三里塚の9・16戦闘評価、黒ヘル偽装での法大襲撃等の対立点を含めて極めて低水準である。将しく、このような内容と形での分裂こそは「共産主義16号」のレヴェルを含めて諸君の政治的共同性の鏡であるとしか言いようがないのである。我々は、八派－全共闘構造批判以降の新左翼諸党派の分裂と混迷を、ハイエナ革マル風に喜こぶのではなく、また中核風な自己満足に陥いるのでもなく、他山の石として受けとめ、全階級戦線の後退戦を突破する方途の獲得と前進を呼びかけつつ、更に我が道を歩んでゆく心算である。全国の同志諸君！5・13～5・15の勝利的前進を踏まえ、更に沖縄－砂川－三里塚戦略の下、全戦線の攻勢を強化せよ！この6月に早稲田－インフレ・投機闘争に集中し勝利せよ！

5・16村井声明を断じて許さず
カクマルせん滅、早大解放へ更に進撃せよ！

全国の同志諸君！「叛旗」購読者の皆さん！激動の早大闘争は、ますます意気盛んであり、カクマル粉砕、早大管理支配体制粉砕の闘いが、山場にさしかかっていることを報告する。4・21文学部大会のカクマルの武装敵対を契機としての圧倒的な昂揚以降、カクマルは自らの消耗を胸に秘めかの「党派闘争の倫理と論理」もかなぐりすて武装敵対・白色テロを唯一の延命策として、当局の圧殺策動とロンドを組み、最もカクマルが恐怖する当局追及の大衆運動を圧殺せんと必至である。カクマルの欺瞞は、行動委員会の戦闘的学友を、白色テロすることにとどまらず、立て看に、行動委の学友の写真を名前入りではり、権力へ売る程である。しかし、早稲田の戦闘的学友は、かかるカクマルの醜悪な敵対を粉砕し、着実に勝利に向かって前進している。

5・2文団交、5・7文団交－試験粉砕闘争、これは、カクマルによる武装敵対により貫徹しえなかったが、全学行動委を最先頭とする早大の戦闘的学友は、その圧倒的な戦闘性と大衆性でカクマルを粉砕した。この闘い一貫してそうだったように、カクマルは再び対当局闘争を圧殺することにより延命せんとしている。しかし、このことが、当局の闘争圧殺策動にくみすることは、あまりにも明らかである。もはや、カクマルの欺瞞性なぞ、早大四万の学生は、誰も信じてはいない。更に、5・8川口君虐殺半周年忌を、全学行動委、全学団交委（準）は、総長に対するゲリラ団交で飾ったのだ。この半年間、川口君虐殺の一半の責任を負う総長村井は、一切の責任を回避し「川口君は、カクマルに反対したから殺された」などと居直り、逃げ回り、あつかましくも理工学部で授業をしていた。

それに対し、強固な意志一致と組織性で、全学行動委、団交委（準）のメンバーは、総長村井を全学生の前に引き出すことに成功したのだ。「総長をつかまえた」の報に、学友は続々結集し、二〇〇〇名で、居直る総長村井を徹底的に追及したのだ。あふれでるエネルギーに、もはや、総長村井は居直れない。全学団交委（準）は5・17再団交を、圧倒的な大衆運動の力で克ちとったのだ。あわてる当局は、機動隊の出動を要請し通用門を閉鎖せんとしたが、あふれでる大衆的エネルギーは、それを突破し、文学部、第一学館への戦闘的デモを貫徹的エネルギーに、カクマルは、なすすべもなく全く学部に[illegible]っていたのだ。

さらに、5・10西早稲田学生集会を全学行動委を中心とした数百の学生大衆の防衛のもとに克ちとった。白色テロ集団－カクマルは、鉄パイプで武装敵対せんとしたが圧倒的な大衆的力の前に、鉄パイプを投げ捨て逃げかえったのである。その失敗を繰り返すまいと、5・11政経学生大会に対して、5・10の朝のテロ集団で学生集会武装敵対せんとし、六〇名の鉄パイプ部隊とそれを倍する私服部隊をもって[illegible]館を封鎖、政経学生大会に敵対してきたが、全学行動委を中核とする戦闘的学友は、それをもはねのけ、圧倒的に政経学生集会を貫徹した。早大大衆運動の自立したうねりは、宗派カクマルの武装敵対・白色テロ、当局の闘争圧殺策動、そして横から闘いを略奪せんと足をひっぱる日共－民青の[illegible]策動を粉砕し、5・17当局団交へ巨大な波として押し寄せていった。

しかし、当局－村井は、総長団交前日になって、突然「団交をこのまま行えば、学内各勢力の間で衝突がおこり、人命が失なわれる事態も起り得るので17日の総長団交を中止する」といった、再々度に渡るペテン的声明を出し、カクマル、日共－民青の「団交破壊」と相呼応して、闘いの圧殺策動へ狂奔してきた。

これに対し我々と全学行動委、団実委（準）を最先頭とする早大の戦闘的友人諸君は、5・16村井声明を粉砕し、団交を貫徹せんと当局－カクマル－民青－権力の四重の包囲網を粉砕せんと、午前の権力による不当弾圧をはねのけ、午後、大隈講堂前に、公然と大衆的に登場した。カクマルの小選挙区制粉砕のチンケな集会にそっぽを向き、早大学友は、拍手をもって、我々をとりかこみ、たちまち数百の隊列を整え、「カクマルセンメツ、団交貫徹」のシュプレヒコールを、ここにまきおこせ、カクマルのいる本部前広場に突入した。かかる勇気あふれた闘いに恐怖したカクマルは、全国動員の白色テロ集団をもって再び武装敵対してきた。確かに我々は前方に大学当局の武装尖兵カクマル、後方に権力－機動隊というなかで困難な闘いを強いられた。しかし、数度の本部前突入を貫徹し、千余の早大大衆を吸引し機動隊との投石戦による攻防を貫徹した。戦闘的早大学友の自衛武装は、反革カクマルの武装敵対に対応し、当局－機動隊の弾圧に対応し強化されている。我々は、断固としてカクマルを粉砕し、全学団交貫徹－早大管理支配体制粉砕に向け持久－対峙を貫徹しなければならない。

われわれは、ここで、早大闘争の諸問題に若干触れようと思う。

まず一点は、カクマルとの党派闘争についてである。（カクマルの反革命的本質、「前衛」主義者の犯罪性については、これまでの報告を参照してほしい。）大衆運動の側からするカクマルに対する反撃は、大衆運動の自立的展開を疎外し、抑圧－圧殺せんとする擬制的な政治集団に対する闘いとして徹底的にカクマルを粉砕しつくすまで貫徹されなければならない。しかし、政治党派間の党派闘争は戦略－綱領域を媒介に貫徹されねばならぬのであり、両者の成立する根拠－位相を混同し、相互に手段化してはならぬということである。われわれも、精力的に、カクマルに対するカイメツ的批判を実

（二面に続く）

＜写真＞5・13～15連続闘争へ突破口を拓いた全国反帝戦線大会（5月13日電通大C棟101番教室）

5・13全国反帝戦線大会、2百余を結集し
圧倒的に克ち取る

全都、全国の同志諸君！友人諸君！5月13日反帝戦線全国大会が勝利的に克ち取られたことを報告したいと思います。

5月13日反帝戦線全国大会は、午後1時より電通大において全国から結集した二百余名の反帝戦線戦士の参集した討論を持って圧倒的に貫徹された。大会に先がけての5・10～11日三里塚第二期工事区域内強制立入調査粉砕闘争を最先頭で戦い抜いた首都圏の同志を中心に、このうち[illegible]との党派闘争を勝利的に推進しつつ、ついに関西地区委員会を結成した関西地区の同志、4月16日愛媛地区反帝戦線を克ち取った四国の同志、弘前、群馬等々の同志と続々と結集をもって熱気のこもったなか大会は首都圏の同志の司会で開催された。

今大会は文字通り、我々の実質的な全国体制に向けた一大橋頭堡としてあったことをまず最初に確認しておきたい。

大会は議案書の内容にもとづいて、70年代中期における情勢の高揚と日本革命運動の展望に向けてその闘いを荷う反帝戦線の任務を明らかにしつつ、幾つかの討論が提出された。

さらに大会は二部にはいり、各地方地区・拠点闘争報告がなされた。とりわけ、対革マルの敵対を粉砕しつつ、早大大衆運動の自立的展開に向け前進しつつあるという力強い早大班の同志からの報告は、一大学、一拠点の枠を越えて70年代中期の学園闘争の地平の分水嶺が早大にあることをはっきりと全員一致で確認された。

さらに千日余の闘いを持続している光文社闘争の報告は、当該一支援の関係を新たな社会運動としての労働運動の飛躍へ向けて困難な闘いを断固として闘い抜いていることが明らかにされた。各地方の党派闘争の内実を日本革命運動の止揚の問題として、反帝戦線の強化拡大が着々と進行していることを満場の拍手で確認された。われわれは断固として全都、全国のあらゆる戦線で闘い抜くことを何度でも断固として確認していかなければならない。そして、立川闘争、三里塚闘争の報告は、われわれが70年代初頭の戦略環の「沖縄－砂川－三里塚」の闘いの血の汗の報告として生々しく報告された。

そして、第三部においては、諸党派、新旧左翼を含めて、一切沖縄闘争からの召還の中、唯一、沖縄に執着してきた我々の沖縄闘争の永続的課題に向けて、共産同神津同志からの発言、そして、最後に数日後に下獄をひかえた三上同志の力強い下獄宣言としての反帝戦線に向けたアピールをもって、大会は全ての議事を完了した。

大会後反帝戦線戦士は、5・13全国大会の成功を踏まえ、5・14立川闘争、5・15沖縄闘争への連続決起を確認し、調布駅まで一大デモンストレーションを敢行した。

反帝戦線大会は、73年春期沖縄－立川－早大－投機闘争として、我々が、沖縄－砂川－三里塚戦略の内化－拡大として戦い抜いている方向の核心性をさらに深めるものとしてあった。我々は新たな情勢の高揚を春闘における大衆のエナジーの登場が、上尾暴動や4・24暴動に見られる旧来のイデオロギーの姦商の一切の無効性のもとにあることを了解してきた。そのことは、基底において現今の支配階級一層の延命策が、三十年代の「恐慌－全面戦争」から、ヴェトナム戦争－世界通貨危機に表象される「インフレ－局地戦争」として現れてきたことの世界史的な把握にて照応していくだろう。沖縄闘争の政治課題からの後退は、社共、革共同、解放派等の「小選挙区制」粉砕へのスライドに見られるごとく我々が国家民族・世界空間の転覆の方途の困難性をつきつけている。我々は昨年5・15における返還式典の日琉一体化策が最大の支配階級の延命環として、あり、逆に我々の革命への指示向線もそこにあることを政治党派が責任を持って思想的・実践的に回答し、全ての反帝戦線戦士がその闘いを全身で闘い抜く必要があるだろう。

5・13全国大会の成果は必ずや今春期沖縄－立川－早大－投機闘争の深化の中に構造化され、70年代中期の日本階級闘争の新たな展開に向けて、我々に課せられた任務として、あらゆる実践をもって答えていくだろう。

早稲田－インフレ・投機闘争勝利！

6・9 首都圏反帝戦線総決起集会
午後6時 幡ヶ谷区民会館
（京王線幡ヶ谷駅下車5分）

7・11共産同政治集会
午後5時半 武蔵野公会堂
（中央線吉祥寺駅南口1分）

三里塚第二期工事区域
強制立入測量阻止を実力戦で撃ち抜く

東峰、横堀地区で公団を蹴散らす
闘いの内実を血肉化し、更に前進せよ

闘いの経過 ―5・10～11―

全国の同志、友人諸君！
5・10～5・11三里塚第二期工事区域立入り調査（第4次強制測量）阻止闘争を、我々は諸戦線の最先頭で闘い抜いた。政府・公団の野望は、本年12月15日の事業認定期限切れ以前の、収用委員会への資料提出（土地収用法35条）をたてまえとしながらも、そのアリバイ作りを通して、反対同盟―諸戦線の後退局面を透視した挑発であることは自明である。農民大衆は、農繁期（とりわけ田植え）のまっ最中であり、猫の手も借りたい忙しい時期にである。卑劣にも…

…中止を海に落し、レッカー車で掲げざるを得ないというハプニングまで生み出した。我々の攻撃によって、奴等は、東峰部落へ近よることができず、なす術をもたないまま、7時33分に中止声明を出さざるを得なかった。更に我々の部隊は、横堀地区へ転戦し、諸派の反対同盟の後からのこのこついていくのを尻目に、又、社会党十一部幹部の妨害をのり超えて、圧倒的なデモンストレーションで、先頭で対峙し、諸戦線の流動をまきおこした。

10日、11日と中核を筆頭とする…

第二期工区の反対同盟員の抱えている問題の中軸は、7年の時間的累積と生活の転換の契機が、現在の情況そのものを抱括できないこと、彼らにはどうしても理解できないのである。そして彼らは小共同性へも回帰できない事も。あわれ彼等は、アリバイ闘争の為に反対同盟の後ろにのこのこと…

若干の総括と展望

今回の「立ち入り調査」に対して対同盟は、頭割りで拠点（民家と団結小屋）を防衛し、すわり込み、スクラム闘争を戦術とする「実力阻止」という方針であった。しかし、第二期工区―周辺を…

5・2進駐完了強行／居座り策動を許さず
治安訓練粉砕、基地撤去へ更なる闘いを

立川

全国反帝戦線大会アピール

＜写真＞5・14立川闘争を圧倒的に闘い抜き立川駅頭で総括集会を貫徹する反帝戦線

戦線復帰アピール
たたかいの磁場への漸近

石井久　大野真理
竹内正男　深沢勉
柳喜之　梅村城次

全国の同志諸君、叛旗読者諸兄！　一年四ヶ月の獄中闘争を貫徹し、激動の階級戦線の一翼を担うべく宣言を送りたい。

この「宣言」は一般的な復帰宣言としてではなく、己の存在感や実存感の確かさを明示すると伴に、獄中闘争を当為一般や先験的把握として流布させない為にも、私たちの主体的総括を簡単ではあるが提示することにより、今後の思想、実践的営為の里程標として置きたい。

私たちにとって、獄中も獄外も価値意識の位相から捉えるならば何れも等価であり、政治や…としての日常性が、生活や現実としての日常性より比重が過剰に増大すると云う点で必然的な存在ではあるが、重要な視座はこの強要された関係や領域を意識的な存在へと踏込む契機の獲得と、負的なものを正的なものへと転位させるべく持続を為し得るか、否かが逆に獄中闘争での持続力―観念力へと転化しうる。この時注視することは国家の階級支配の鏡を＜大衆＞存在とするならば、一方では組織（政治・社会）の原理や内的指抗、矛盾の鏡は＜対―家族＞関係の裡にその陰画を見届はなくてたたかいの矛盾それ自体を、歴史的日常へと還流し、自己幻想―を相対化させ国家を廃絶し、階級を死滅に追い込む回路を現実過程に往還させ沓積することにより、日本の左翼の負的伝統である精神の…ることが可能であるが故に、私たちは自己意識の拒絶的契機や生活的実存を逸脱して表象する政治、革命、獄中（裁判）の総過程で、現実のたたかいの矛盾（政治的、社会的）を規範や倫理一般を至上化、強要してはならぬということである。そうで現実の実践過程で不断に生起する＜綱領―戦略＞の肉離れ現象の象徴である政治過程論と観念的啓蒙主義との円環を止揚しなければならない。私たちはこれに対して、この間「＜沖縄―三里塚―砂川＞戦略の深化・拡充」として実践を展開してきた。この営為は未だ端緒の途に着いたのみではあるが、確信を持って回答の糸口を把みうると断言できる。

国家論―組織論を国家＝政府形態論として「観念論」的に、他方では現実政治＝プラグマティズムで総てを駆使してきた相互依存の根拠を撃ち、止揚することが獄中（裁判）―獄外を断り結ぶ＜原点＞である。前途は多難ではあるが、情況は決して＜明るい＞ものでもなく、かといって＜暗く＞絶望的でもない奇妙な存在ではあるが国家（行政的権力）との苛烈なたたかいの磁場に怯懦することなく眼前の矛盾を自然として背負い、生活―政治―戦争の悲惨をも伴に＜かくめい＞することのみである。残る三里塚、11・19四戦士を断乎として奪還せよ！　更に確実な歩みを＜大地＞に刻印し、十年戦争に伴に進撃せん！

類廃状況、虚無主義―スターリニズムや、近代主義―プラグマティズムを撃ち、自然発生性と自然成長性との円環を止揚しうると考える。ここが階級的修羅場である。

他方、現代革命の核心点は依然として＜国家＞問題であるが…

71年11・19沖縄闘争　7名の同志を相次いで奪還す
深田同志(71年11・17立川闘争報告)へ2年6ヶ月の報復的実刑判決／

71年10・17立川闘争戦士深田同志に二年六ケ月の実刑判決下る！

71年初頭よりの立川闘争は、困難な闘いのうちに、立川闘争は、＜立川＞闘争ではないことの確信を持って、確実に政治的拠点闘争の明日への持続的切開が行なわれている。反戦放送塔―斬壊を思想的実践的武器とした闘いの諸実践…

◎保釈金カンパの集中を！

公判日程

6月11日　青学大闘争第二回公判　一時・東京地裁
6月12日　三里塚東峰十字路闘争第四回公判、10時、千葉地裁
6月15日　商科短大6／17闘争第二回公判、一時、八王子地裁
6月20日　法大闘争裁判、一時、東京地裁
6月21日　11／19沖縄闘争、第八回公判、一時、東京地裁

三里塚第二次代執行阻止闘争
東峰統一被告団　機関紙

執念城

―月刊―
編集　三里塚第二次代執行阻止闘争
東峰統一被告団
発行　三里塚空港粉砕青年行動隊
定価50円　10号分700円(〒共)

定期購読募集中！
10号分700円（〒共）

申し込み先
千葉県千葉市松波3－8－10
岡田秀樹宛
TEL　0472―54―1526
振替番号　東京121352

SECT6・大正闘争資料集
残部僅少／　書店にて販売中　¥800